

# 被服製作学習に対する意識と有用感の検討（第一報）

－大学生への調査から－

富田 道子

広島都市学園大学 子ども教育学部

## 要 旨

本研究では、小学校から高等学校において被服製作を経験してきた大学生を対象に、製作学習に対する意識・体験、学習動機等についての意識、自作経験について、自己効力感との関連を検討した。

その結果、先行研究で示された「自己効力感が高いほど被服製作学習に対しても肯定的で、学習や生活での実践に取り組む意欲が高い」と同様の傾向が確認できた。

一方、先行研究とは異なる傾向として、自己効力感がそれほど高くないとしても、被服製作によって充実感や達成感を獲得できていること、学習に対する前向きな姿勢、友人との協働活動のなかで新たな可能性が切り拓かれる実感を得たいという意識を確認することができた。また、製作の取りかかり段階で抱く不安、苦手意識などが製作途中で変容している可能性、さらに、ミシン縫い学習における有用感、知識と技能を習得し作品を完成させることで得られる達成感だけで生まれるものではないことも示唆された。

キーワード：被服製作、ミシン縫い、有用感、協働活動、大学生

## 1 研究の背景と目的

### 1) 研究の背景

私たちが日常的に着用する被服の多くは既製服である。近年、コロナ禍による家計への影響が叫ばれるなか、ファストファッションの売り上げはアパレル業界で国内首位を維持し続けている<sup>\*1</sup>。このような消費社会において、被服製作の技能を必要とする場面は激減し、すでに2001年には布施谷、高部が基礎縫いの技術が十分定着していない大学生が増えていることを報告している。さらに、平成21年（2009年）に告示された高等学校学習指導要領以降、多くの高等学校が履修する「家庭基礎」において被服製作が必修とされなくなったことも、大学生の基礎縫い技術未定着の要因と推察する。

そうしたなか、教員養成大学の学生は基礎縫い技能の習得を、補修など日常生活で活用できる機会があることから教育的意義として強く捉えられやすい。

しかし、ミシン縫いの技能の習得については、製作物を学校・家庭生活で活かす機会があったとしても、各家庭におけるミシンの普及率<sup>\*2</sup>を考えるとその意義は基礎縫いよりも見出しにくいように思われる。

先行研究において、向山（1975）は「手は人間の諸器官のなかで脳細胞と最も関係が深

い。したがって、子どもが幼児の段階から、少年期、青年期と発達していくために手は重要な役割を果たす。そして、人間の発達には、頭脳と体が結合して発達するので、手の発達が頭脳を発達させ、逆に思考活動と結びついて、手先が器用になっていく。(中略)触ったり、切ったりする中で材料について知り、やがて科学的認識へと育っていくことになる」と述べている。高木(2005)はこの点について、「布を用いた製作をしなければ得られないことではない」としながらも、「製作自体が喜びにつながることで、布を扱えることが学校や地域における交流手段になること、先人の技(わざ)を学ぶことで裁縫文化を継承する担い手になることができ、手仕事のおもしろさや楽しさがわかる」と述べた。さらに、「被服は不得意」とする教師が以前より増えていることを指摘した上で、教員養成の実態からも被服学習を充実させるためには授業研究が欠かせないとまとめた。

竹吉、多々納(2005)は、小学校家庭科における第6学年の製作活動に関する意識・実態調査を行った。その結果、「生活に役立つ物を作ろう」の授業で、製作活動における「ミシンの糸のセット」や「玉どめ」などで得意・不得意感に性差がみられるとしながらも、今後さらに学習したい内容として男女ともに「ミシン縫い」を挙げていることを報告した。

一方、児童が製作活動にもっと意欲的に取り組むために望んでいることとして、「自分で作りたいものをそれぞれ作る」「先生やボランティアの人など、作り方を教えてくれる人が2人以上いる」「ミシンなどの道具の数をふやす」が挙げられたと報告した。児童が自分の作りたいものを作るためには、ヒトやモノといった学習環境の充実が求められる。

池崎(2017)は、第5学年の児童が第6学年になると製作実習への意識が下降するという先行研究から、製作技能に対する興味関心や意欲を継続させるために、どのような課題があるのかを明らかにすることを目的とした。その結果、児童に手縫いやミシンで製作するための技能を学習する必要性を意識化するためには、教師が明確な指導観を持っていないことを示した。その後、渡邊、池崎(2020)の報告において、被服製作の技能向上を目指すには、児童に被服製作に対する有用性を強く意識させ、自ら課題を設定し実践することが、技能の定着につながるのではないかと推察している。

これらのことから、ミシン縫いにおける被服製作の「有用性」をどう位置づけるかが問われているように思われた。

大学生の被服製作に対する意識と自己効力感について、扇澤、川端(2009)は、被服製作に対する好き・嫌いの意識が被服製作に対する肯定感・否定感と関連することを報告した。また、自己効力感が高く被服製作が好きと回答した群は、授業に積極的に取り組み、学習が楽しいと感じていたとする一方、自己効力感が低く被服製作が嫌いな群には、課題を易しくして製作学習の作業を面倒と思わず、苦手意識をもたせない配慮が必要だとした。

さらに、今後の被服製作のあり方について、指導者は学習者の衣生活を豊かにするような生活に密着した課題内容を提供することはもちろん、学習者が知識や技術を習得するだけでなく、精神的な充実感・達成感を得られる実践・体験ができるような課題内容を検討することが重要だとまとめた。

## 2) 研究の目的

先行研究から、改めて、被服製作における知識・技能の習得が未知の状況<sup>\*3</sup>も含めた多様な場面で活用できること、充実感や達成感を獲得できることを確認した。また、平成29年告示の小学校学習指導要領解説 家庭編に示された「なみ縫いについては、2～3針続けて縫う程度でも良いと考えられる」に従えば、ミシンの製作課題も易しくし、製作学習の作業を面倒と思わず、苦手意識をもたせない配慮は十分に考えられる。

しかし、研究者のこれまでの児童・生徒への指導経験から、製作課題の内容や難易度以外にも、被服製作に対する意識やそれに向き合う姿勢に影響を与えているものがあるように思われる。

先の大学における調査対象者は18歳から28歳と幅広く、家庭科教育法の未履修・既履修者が混在していることが想定されることから、本研究では、教員養成大学の一定学年の学生を対象に、製作学習に対する意識・体験、学習動機等についての意識、自作経験と自己効力感との関連等を検討しながら、ミシン縫いにおける有用感について考察することを目的とする。

## 2 研究方法

### 1) 調査方法

扇澤，川端（前掲）による調査では、①自己効力感を測定するものとして成田，下仲ら（1995）が明らかにしたSelf-Efficacy尺度（以下，SE尺度とする）から抽出した17項目，②被服製作に対する「好き・嫌い」，③被服製作への意識と成功・感動体験と現在の意識についての50項目，④生活での実践についての7項目の計81項目を質問項目として設定している。

本研究では、自己効力感を測定するSE尺度の中で被服製作に関連すると思われる10項目を抽出した。具体的には、「自分で立てた計画は、うまくできる自信がある」「しなければならないことがあれば、すぐにとりかかる方だ」「初めはうまくいかない仕事でも、できるまでやり続ける」「非常にややこしく見えることでも、やってみようと思う」「面白くないことをする時でも、それが終わるまで頑張る」「何かをしようと思ったら、すぐに取りかかる」「新しいことを始めようと決め、出だしでつまずいても諦めない」「失敗すると、一所懸命やろうと思う」「何かしようとする時、自分にそれができるかどうかやってみないとわからない」「人に頼らない方だ」である。これらについて「現在のあなたの意識について、ありのままに回答してください」を提示した。回答方法は「とても当てはまる(4)」「やや当てはまる(3)」「あまり当てはまらない(2)」「全く当てはまらない(1)」の4件法とした。

次に、被服製作への意識・体験については、小・中・高等学校時代に取り組んだ被服製作体験をふり返るものとして、先行研究の50項目から本研究に関連すると思われる15項目を抽出した。具体的には、「基礎的技術が学べる」「製作実習は生活に役立つ」「作業がめ

んどくさい」「ミシンの操作方法が難しい」「製作実習は苦手である」「根気のいる作業である」「既製品を購入するほうがよい」「自分で工夫する力を養うのに役立つ」「嫌いでも続けていると、やがて上手になる」「製作中は無心になれる」「上手くできないとイライラする」「手作りの品はひとの温かさが感じられる」「自分の力で仕上げることで、自信がつく」「作ったものに愛着を感じる」「作品が完成すると、達成感が得られる」である。これらについて「あなたのこれまでの被服製作体験をふり返り、当時の意識をありのままに回答してください」を提示した。回答方法は4件法で実施した。

新たに設定した調査項目の1つとして、「学習動機等についての意識」がある。

ここでは、学習者自身が学習場面において達成しようとしている理由や目的がより多様であることや、そこに友人との関わり方が影響しているように思われるため、市川（1995）の学習動機尺度を参考に10項目を抽出・設定した。具体的には、「すぐに役に立たないとしても、できることが増えること自体が面白い」「色々な知識・技能を身につけた人になりたい」「何かができるようになっていくことは楽しい」「色々な面から物事が考えられるようになる」「勉強したことが、生活の場面で役に立つ」「知識や技能を使う喜びを味わいたい」「友だちと一緒に取り組みたい」「友だちとの関係の中で、自分を成長させたい」「作品を一人で作ったことを、正しく評価されたい」「周りの人が頑張っているとそれにつられて頑張れる」である。これらについて「あなたのこれまでの被服製作体験をふり返り、当時の意識をありのままに回答してください」を提示し、回答方法は4件法で実施した。

さらに、「自作経験」の調査項目も設定した。自作としては「手縫い」「ミシン縫い」の2項目を設定し、それぞれの経験を回答しやすいよう、具体的な作品事例を挙げた。

「手縫い」の場合、雑巾、巾着袋、手提げ袋、ナップックザック、小物入れ、マスコット、コースター、ペンケース、針さし、ほつれや穴などの補修、その他の11項目とし、「ミシン縫い」については、雑巾、巾着袋、手提げ袋、ナップザック、エプロン、ランチョンマット、小物入れ、マスコット、クッション、コースター、カバー類、刺繍、ウォールポケット、その他の15項目とした。

これらについて「これまで作ったことのあるものに、すべて丸をつけてください」を提示した。加えて、その他については「具体的な作品を教えてください」を提示した。

## 2) 調査対象者と調査時期

設定した質問項目を用いて、H大学の教職専門科目である「初等家庭科教育法」受講者18名を対象に、2021年10月の衣生活分野の授業検討に入る直前に調査を実施した。そして、これらの調査から得られたデータを分析し、傾向を探った。

なお、4件法の分析においては、母集団の少なさによる分布の偏りが考えられるため、平均値ではなく中央値を用いることとする。

### 3 結果および考察

#### 1) 自己効力感

調査項目10項目のうち、「面白くないことをする時でも、それが終わるまで頑張る」「初めはうまくいかない仕事でも、できるまでやり続ける」「失敗すると、一所懸命やろうと思う」「何かをしようと思ったら、すぐにとりかかる」「人に頼らない方だ」「自分で立てた計画は、うまくできる自信がある」の6項目については、中央値が高い値を示した。つまり、自分で決めたことであれば、あるいは、取り組み始めれば、途中で何か壁にぶつかったとしても最後まで根気よく、粘り強く取り組む姿勢があることを確認できた。

一方、残りの4項目「新しいことを始めようと決め、出だしでつまずいても諦めない」「非常にややこしく見えることでも、やってみようと思う」「しなければならぬことがあれば、すぐにとりかかる方だ」「何かしようとする時、自分にそれができるかどうかやってみないとわからない」ではやや低い値を示した。この4項目は新しいことに挑む意識に関わる内容であることから、ねらいの理解や見通しをもつことができれば、意識変容の可能性が考えられる。

#### 2) 被服製作への意識・体験

被服製作への意識・体験に関する調査結果において、中央値を降順に並べ替えたのが表1である。なお、網掛けをした項目は逆転項目である。

中央値を見ると、15項目中「作品が完成すると、達成感が得られる」「自分の力で仕上げることで、自信がつく」「作ったものに愛着を感じる」「製作中は無心になれる」「基礎的技術が学べる」「製作実習は生活に役立つ」「手作りの品は人の温かさが感じられる」「嫌いでも続けていると、やがて上手になる」の8項目で高い値を示した。ここから、被服製作の学習によって知識・技能の習得が生活の中で活用でき、充実感や達成感を獲得できるということが確認できた。

一方、ミシンの操作や被服製作への苦手意識なども表出し、そのことが手作りの温かさを感じながらも「既製品を購入したほうがよい」という意識を引き出す要因になっているように思われる。

表1 被服製作への意識・体験

調査項目	平均値	中央値
作品が完成すると、達成感が得られる	3.72	4
自分の力で仕上げることで、自信がつく	3.56	4
作ったものに愛着を感じる	3.50	4
製作中は無心になれる	3.33	4
基礎的技術が学べる	3.50	3.5
製作実習は生活に役立つ	3.33	3.5
手作りの品は人の温かさが感じられる	3.33	3.5
嫌いでも続けていると、やがて上手になる	3.28	3.5
自分で工夫する力を養うのに役立つ	3.17	3
根気のいる作業である	2.89	3
作業がめんどくさい	2.61	2
ミシンの操作方法が難しい	2.61	3
上手くできないとイライラする	2.89	3
既製品を購入するほうがよい	2.72	3
製作実習は苦手である	2.39	3

### 3) 学習動機等についての意識

学習動機や友人との関わりについての意識に関する調査結果において、中央値を降順に並べ替えたのが表2である。

中央値を見ると、すべての項目について肯定的な意識をもっていることが確認できた。

とりわけ、「何かができるようになっていくのは楽しい」「友人と一緒に取り組みたい」「色々な知識・技能を身につけた人になりたい」「友人との関係の中で、自分を成長させたい」「勉強したことが、生活の場面で役に立つ」の5項目で高い値を示していることから、新たな可能性が切り拓かれる実感が得られる学びの場や、協働活動のなかでできることを増やしていくことが求められているように思われた。

表2 学習動機等についての意識

調査項目	平均値	中央値
何かができるようになっていくことは楽しい	3.67	4
友人と一緒に取り組みたい	3.44	4
色々な知識・技能を身につけた人になりたい	3.39	3.5
友人との関係の中で、自分を成長させたい	3.39	3.5
勉強したことが、生活の場面で役に立つ	3.28	3.5
すぐに役に立たないとしても、できることが増えること自体が面白い	3.39	3
知識や技能を使う喜びを味わいたい	3.22	3
作品を一人で作ったことを、正しく評価されたい	3.22	3
色々な面から物事が考えられるようになる	3.06	3
周りの人が頑張っているとそれにつられて頑張れる	2.78	3

### 4) 自作経験

小学生から高校生までの間に、授業やそれ以外の時間も含めて、「手縫い」と「ミシン縫い」で作ったことがあるものを回答してもらった。調査結果は表3-1・2のとおりである。

表3-1 手縫い経験

手 縫 い 作 品 数										
雑巾	袋もの	手提げ袋	ナップザック	小物入れ	マスコット	コースター	ベンケース	針刺し	補修	その他
8	4	1	6	6	7	12	1	5	7	7

表3-2 ミシン縫い経験

ミ シ ン 縫 い 作 品 数														
雑巾	袋もの	手提げ袋	ナップザック	エプロン	ランチョンマット	小物入れ	マスコット	ベンケース	クッション	コースター	カバー類	刺繍	ウォールポケット	その他
6	9	5	16	15	3	4	1	3	3	3	3	2	4	0

手縫いでは「コースター」、ミシン縫いでは「ナップザック」や「エプロン」の回答数が多い。もっとも多く、これらが学校の授業で扱われた題材であると思われる。

また、「その他」の回答として、手縫いの場合はポケットティッシュケース、刺繍、



箸ケース、部活のお守りが挙げられ、ミシン縫いの場合はパソコンケースが挙げられた。

さらに、学生一人ひとりの12年間の手縫い・ミシン縫いの合計作品数を見てみると、もっとも多い学生で23作品、もっとも少ない学生で3作品と、ものづくり経験に大きな差があることも確認できた。

## 5) 自己効力感と被服製作への意識・体験の関連

自己効力感と被服製作への意識・体験の関連をみるためにクロス集計を行ったところ、自己効力感が高いほど被服製作に対しても肯定的な意識をもつ傾向があることが確認できた。

次に、自己効力感の調査結果の中央値がやや低い値を示した4項目で「あまり当てはまらない(2)」「全く当てはまらない(1)」と回答した者が、2)の被服製作への意識・体験における調査で「とても当てはまる(4)」「やや当てはまる(3)」と回答した割合を表4に示した。なお、網掛け項目は逆転項目である。

表4 自己効力感と被服製作への意識・体験の関連 (%)

被服製作学習への意識・体験 自己効力感 やや低い群	作品が完成すると達成感が得られる	自分の力で仕上げることで自信がつく	作ったものに愛着を感じる	製作中は無心になれる	基礎的技術が学べる	製作実習は生活に役立つ	手作りの品は人の温かさが感じられる	縫いでも続けると、やがて上手になる	自分で工夫する力を養うのに役立つ	根気のいる作業である	作業がめんどくさい	ミシンの操作方法が難しい	上手くできないとイライラする	既製品を購入するほうがよい	製作実習は苦手である
新しいことを始めようと決め、出だしでつまずいても諦めない	100.0	100.0	90.0	90.0	100.0	80.0	90.0	80.0	80.0	70.0	50.0	70.0	80.0	40.0	70.0
非常にややこしく見えることでも、やってみようと思う	100.0	100.0	100.0	84.6	100.0	84.6	76.9	76.9	84.6	61.5	30.8	46.2	92.3	61.5	53.8
しなければならないことがあれば、すぐにとりかかる方だ	100.0	100.0	93.3	93.3	100.0	86.7	86.7	80.0	80.0	66.7	40.0	53.3	73.3	60.0	53.3
何かしようとする時、自分にそれができるかどうかやってみないとわからない	100.0	100.0	93.8	87.5	100.0	81.3	81.3	81.3	75.0	62.5	43.8	62.5	81.3	56.3	62.5

分析結果から、自己効力感についての調査で新しいことに挑む意識がやや低い者であっても、製作学習で獲得できる力、役立ち感を自覚し、作品を大切にしたい気持ちなどに肯定的な姿勢を示していることが確認できた。

また、次の2点にも注目した。

一つは、出だしでつまずくと諦めがちな者であっても、「既製品を購入するほうがよい」と思っていない者が一定数いたことである。

二つは、非常にややこしく見えることに躊躇しがちな者であっても、「(縫う)作業がめんどくさい」と思っていない者が比較的多くいたことである。

これらのことを踏まえると、製作の取りかかり段階で抱く心配、不安、苦手意識などが、製作途中で変容している可能性が示唆される。

## 6) 自己効力感と学習動機等についての意識の関連

自己効力感と学習動機等についての意識の関連をみるためにクロス集計を行ったところ、自己効力感が高いほど学習動機等に対しても肯定的な意識をもつ傾向があることが確認できた。

次に、自己効力感における調査結果でやや低い値を示した4項目で「あまり当てはまらない(2)」「全く当てはまらない(1)」と回答した者が、3)の学習動機等についての意識調査で「とても当てはまる(4)」「やや当てはまる(3)」と回答した割合を表5に示した。

表5 自己効力感と学習動機等についての意識の関連 (%)

学習動機タイプ	充実志向			訓練志向	実用志向		関係志向			自尊志向
自己効力感 やや低い群	すぐに役に立たないとしても、できることが増えることと自分が面白い	色々な知識・技能を身につけた人になりたい	何かができるようになっていくことは楽しい	色々な面から物事が考えられるようになる	勉強したことが、生活の場面で役に立つ	知識や技能を使う喜びを味わいたい	友人と一緒に組みたい	友人との関係の中で、自分を成長させたい	周りの人が頑張っているそれにつられて頑張れる	作品を一人で作ったことを、正しく評価されたい
新しいことを始めようと決め、出だしでつまづいても諦めない	93.3	93.3	100.0	86.7	80.0	73.3	86.7	86.7	53.3	93.3
非常にややこしく見えることでも、やってみようと思う	92.3	92.3	100.0	76.9	76.9	69.2	92.3	84.6	69.2	84.6
しなければならないことがあれば、すぐにとりかかる方だ	100.0	100.0	100.0	90.0	90.0	80.0	90.0	90.0	90.0	90.0
何かしようとする時、自分にそれができるかどうかやってみないとわからない	93.8	87.5	100.0	75.0	75.0	81.3	93.8	87.5	68.8	87.5

分析結果から、自己効力感についての調査で新しいことに挑む意識がやや低い者は、学習動機等についての項目の「周りの人が頑張っているそれにつられて頑張れる」に対する肯定的な回答割合もやや低い傾向にあることがわかった。

しかし、それ以外の学習動機や友人との関わり項目については肯定的な姿勢を示していることが確認できた。

なお、この自己効力感4項目の高い群についても「周りの人が頑張っているそれにつられて頑張れる」との関連を見たところ、やや低い群と同様に、肯定的な回答割合が低い傾向が確認できた。

これらのことを踏まえると、被服製作において学習者がエンパワメントされ、活動の持続性を保つ上で、「誰かの頑張り」の影響は受けにくいことが示唆される。

さらに、市川(前掲)の5つの「学習動機タイプ」を本研究に援用・分析すると、『充実志向』、『関係志向』のなかの「友人と一緒に組みたい」「友人との関係の中で、自分を成長させたい」の2項目、『自尊志向』の計3タイプが、被服製作と特に関連しているように思われる。



## 7) 自己効力感と自作経験の関連

1) の自己効力感に関する項目と4) の自作経験の関連を分析した結果、学生の12年間の手縫い・ミシン縫いによるものづくりの経験（作品数）と自己効力感の間に関連は見られなかった。

## 4 まとめ

本研究では、小学校から高等学校において被服製作をしてきた大学生を対象に、製作学習に対する意識・体験、学習動機等についての意識、自作経験と自己効力感の関連を検討した。

その結果、先行研究で示されたように、自己効力感が高いほど被服製作に対しても肯定的で、学習や生活での実践に取り組む意欲が高い傾向が確認できた。

一方、先行研究とは異なる傾向として、自己効力感がそれほど高くなくとも、被服製作によって知識・技能の習得が生活の中で活用でき、充実感や達成感を獲得できていること、加えて、学習に対する前向きな姿勢や、友人との協働活動のなかで新たな可能性が切り拓かれる実感を得たいという意識も確認できた。

また、自己効力感や被服製作に対する意識調査結果から、新しいことを始める時に出だしでつまずくと諦めがちな場合、「ミシンの操作方法が難しい」「製作実習は苦手である」と回答する傾向が見られたが、製作の取りかかり段階で抱く心配、不安、苦手意識などが製作途中で変容している可能性も示唆された。

加えて、ミシン縫い学習における有用感、知識と技能を習得し作品を完成させることで得られる達成感、「できた」という成功の喜びだけで生まれるものではないことも示唆された。

本調査対象者である大学生が小学生から高校生の頃の被服製作の過程で、何が起こり、どのような経験をしたのか、他者とのような関わりがあったのかを確認するのは難しい。

そこで、小学校の家庭科授業の参与観察等からこれらを分析するのが今後の課題である。

本稿は第42回日本家庭科教育学会中国地区会研究発表会の内容に加筆したものである。

### 【注】

- 1 ファッション業界では主要販路での販売が伸び悩むなか、成長が見込めるネット通販、海外事業の拡大に力を入れている。ファッション業界の売上高・純利益・営業利益率ランキング（決算期2021年3月）によると、1位ファーストリテイリング（ユニクロ）、2位しまむら、3位GU（ファーストリテイリンググループ会社）と報告された。

<https://20jobguide.info/tenshoku-fashionsales/> 令和3年11月1日閲覧

- 2 内閣府消費動向調査のなかの、主要耐久消費財等の普及率（全世帯：平成16年3月末現在で調査は打ち切られている）報告によると、ミシン普及率のピークは1960年代から1970年代で約84～85%となっており、調査最終年の平成16年（2004年）は69.3%であった。その後の変化を追うことはできないが、アパレル廃棄（衣料ロス）の問題が噴出した2017～2018年頃までは、家庭におけるミシンの普及率はそれ

ほど高いとは思われない。

コロナ禍で手作りマスクをきっかけに、ミシンの販売台数が増えたという報道はある。

<https://www.esri.cao.go.jp/jp/stat/shouhi/shouhi.html> 令和4年1月24日閲覧

- 3 東日本大震災直後の被災地から、救援物資として届けられた衣服のサイズ直しのために裁縫用具の要望があった。日本家政学会の被服関係の部会や支部が中心となり、全国の会員に裁縫セットの寄付が呼びかけられ、現地に送付した。また、生活やものづくりの学びネットワーク世話人も、避難住民に裁縫道具を送るための寄附を会員に呼びかけ、現地に送付した。

生活・ものづくりの学びNetニュース第2号（2011年6月発行）

#### 【参考・引用文献】

- 池崎喜美恵. (2017). 児童の製作技能に対する意識と課題. 日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集, 60 (0), 63.
- 市川伸一. (1995). 学習動機の構造と学習観との関連. 日本教育心理学会第37回総会, 177.
- 扇澤美千子, 川端博子. (2009). 被服製作学習への意識と自己効力感の関連:大学生の調査による考察. 茨城キリスト教大学紀要, 43, 人文科学, 37-48.
- 高木直. (2005). これからの被服学習を考える. 家庭科研究, 245, 4-11.
- 竹吉昭人, 多々納道子. (2005). 小学校家庭科における布を用いた製作活動の学びの実態. 島根大学教育臨床総合研究紀要, 4, 131-141.
- 成田健一, 下仲順子他. (1995). 特性的自己効力感の検討:生涯発達の利用の可能性を探る. 教育心理学研究, 43, 3, 306-314.
- 布施谷節子, 高部啓子. (2001). 家政系女子短大生における手縫いの技能の実態. 日本家庭科教育学会誌, 43, 273-278.
- 向山玉雄. (1979). 遊びと労働で育つ子ども. 東京: 青木書店.
- 渡邊真弓, 池崎喜美恵. (2020). 小学校家庭科における被服製作に対する児童の意識の変容:先行調査との比較. 東京学芸大学紀要 総合教育科学系, 71, 469-479.